

## 解題

### 王傑文「日常生活とメディア化する他者」

西村 真志葉  
NISHIMURA Mashiba

本稿は、王傑文著『日常生活與媒体化的「他者」』の和訳である。原文は2011年に中国伝媒大学の機関紙『現代伝播』第8期において発表された。

日本の柳田国男のように絶対的な「民俗学の父」を持たない中国民俗学だが、その母体とされる新文化運動の潮流のなかで民俗学と出会い、苦難の時代においてもそれを諦めず、人材の育成とディシプリンの創設に生涯を捧げた功労者として、慣例上「中国民俗学の父」と称される人物に、鐘敬文氏がいる。王傑文氏は、この鐘敬文氏が生前受け持った最後の学生の一人である。

王氏は1975年生まれの41歳。1998年に山西師範大学文学部を卒業後、北京師範大学で修士博士一貫、民俗学を学んだ。鐘敬文氏は、この勤勉で向上心が強い山西省柳林県の小さな農村出身の青年をとっても愛した。だが、王氏が博士課程一回生に進級した2001年、鐘氏は100歳を目前に逝去する。それは、中国民俗学史上、圧倒的な存在感を放っていた鐘敬文という一つの時代の終焉を意味していた。奇しくも当時、新たに公布された教育部の学科編成の影響や、さらには鐘氏の牙城だった民間文化研究室の分裂などを受けて、北京師範大学の民俗学科は急速に求心力を失っていた。今思えば、王氏を含む鐘敬文氏最後の学生たちは、あたかも時代の岐路に立たされた中国民俗学の試金石のような存在だった。

鐘氏の死後、彼の学生たちは別の指導教官のもとへ引き取られ、王傑文氏も北京師範大学民俗学・文化人類学研究センター教授、劉鉄梁氏に師事することになる。鐘敬文という名を背負い、分裂した民間文化研究室の一方を代表し、さらには中国民俗学の将来への不安と期待が合い混じったまなざしを向けられる中で、当時師弟2人にのしかかっていた重圧のほどは察するに余りある。だが、その重圧を押しつけるかのように、2004年、王氏は郷里一帯で行ったフィールドワークに基づく論文『陝北・晋西の傘頭秧歌—民衆の諧謔と郷土社会の秩序—』で博士学位を取得する。これは、春節期間限定で披露される現地のパフォーマンス「傘頭秧歌」に俯瞰的な描写を加えたいうえで、装飾や動作、言語を含むその体系から構造性と非構造性を読み取り、非構造性としての笑いが儀礼的に構造性を「顛覆」させる点を指摘した良作である。この論文で王氏が民俗学博士号を取得した瞬間、それは中国民俗学の未来を担う次世代の民俗学者の誕生の瞬間だったと言えるだろう。

その後、王氏はポストドクターとして中国伝媒大学芸術学科へ赴き、翌年同大学の演劇映像文学部の講師に迎えられた。ちょうど中国伝媒大学が50年以上「北広」の愛称で親しまれた北京広播学院から改称し、研究水準のさらなる向上に力を入れていた折のことである。中国民俗学きって

の名門大学の博士学位を持つ王氏は、潤沢な研究費を与えられたのはもちろん、講師就任の2年後には副教授に昇格、その翌年にはヘルシンキ大学へ公費派遣、と破格の待遇で迎えられた。「中国伝媒大学は宝物でも手に入れたかのようだ」——これは元指導教官の劉鉄梁氏の言葉だが、文字どおり「悲喜交々」といった口ぶりです。そう述べた劉氏の胸に去来するものは何であったらうか。

同期の学生たちと比べておそらく最も恵まれた条件下にあった王氏は、しかし、それに甘んじることはなかった。王氏はつねに国内外の動向にアンテナを張り、圧倒的な読書量を武器に、その時々の前衛的な話題を追いかけるように、論考や読書ノートを発表し続けた。たとえば、研究対象の拡大に伴い、1990年代後半から中国民俗学内で盛り上がりを見せた都市民俗学や都市伝説研究の流れを受けて、ブルンヴァン著『消えるヒッチハイカー』を強く意識した『ドライブする幽霊—「現代都市伝説」と「反伝説」—』（2005）を発表、その後も「現代」の視野を取り入れた『アニメ映画の叙事構造—「シンデレラ」に関する形態学研究—』（2006）や『呪術思想、魔法昔話、そしてテレビ広告』（2006）、『アニメ映画と精神治療—「ライオンキング」の精神分析研究—』（2011）などの論考を発表した。中国民俗学内でテキストの位置付けをめぐる論争が起きれば、海外のテキスト批判などを参照して『「類型」から「類型」へ—「間テキスト性」』（2011）や『コンテキスト主義者のテキストへの回帰』（2013）、『「民俗テキスト」の意味と境界—「文化的実践」としての口承芸術—』（2014）を書き、文化の創造が話題にのぼれば、日本やドイツから導入されたフォークロリズム概念を整理し『フォークロリズム及びその差異化した実践的民俗研究』（2014）をまとめた。また、インディアナ大学帰りの研究者が中心となって一時代を築いたパフォーマンス研究に呼応するものとしては、『「パフォーマンス理論」以降の民俗学—「文化研究」あるいは「ポスト民俗学」—』（2011）、『「パフォーマンス性」と「パフォーマンス研究」のパラダイムシフト』（2014）などがあり、中国社会科学院民俗文学研究所が一丸となって進めるパリ・ロード理論による叙事詩研究についても、『テキストとコンテキスト化—「ホメロス問題」における二つの問題—』（2011）、『テキストのエスノグラフィー—ラウリ・ホンコの「叙事詩研究」—』（2015）などを発表している。そして内省思想や民俗誌をめぐる再考が主流になり始めた2010年前後からは、再帰的人類学なども視野に入れた『民俗誌は民俗学にとって何を意味するか』（2008）や『表現と再構築—人類学の映像の「真実性」を顧みて—』（2010）、『「存在」と「生成」—「実験のエスノグラフィー」を顧みて—』（2011）を執筆し、さらに生活世界概念が中国民俗学の揺るぎない志向性として定着すると、『「日常生活の啓蒙」を超越して—「経験的文化研究」に関する理解と批評—』（2014）を発表した。今回和訳した本稿もこの最後の流れのなかで書かれたものだが、それは呂微、戸曉輝両氏の超越論的な生活世界研究の後を追うのではなく、「超越論的現象学の擁護者になることはできない」というシュッツの言葉そのままにこれを暗に批判しながら、現象学的社会学やエスノメソドロジー、メディア人類学、さらにはポストメディア人類学まで広く射程に入れた日常生活研究の可能性を示唆している。

さて、一貫した理論を持たず、異なるトピック間を機敏に駆け巡る王氏のこうした研究活動をどう評価するかは意見が分かれるところだろう。また、一本の論考にしばしば大量の理論が登場するが、一つひとつの理論の理解度や引用の仕方に偏りがあるのは否めない（たとえば本稿にもシュッツの自然的態度などについて誤解を招く記述が登場する）。だが、過去の中国民俗学に捕らわれない、いや、民俗学そのものに捕らわれないかのような不思議な軽やかさは、王氏の論考を特徴づけるユニークな個性でもある。さらに言えば、背景や立場も異なる発言や概念、思想であっても上手く折り合いをつけてまとめ上げ、そのエッセンスをふんだんに自らの主張に取り込

んでゆくというのは、決して容易なことではない。やはり王氏に類まれなセンス、十分な技量、そしてなにより地道な基礎勉強があつてこそであろう。私はふと、海外の民俗学者が北京で講演をすると聞けば必ず駆けつけ、学生に交じって熱心にメモを取り、講演終了後には講演者を質問攻めにしていた氏の姿を思い出す。教授に昇格した現在にあつても、彼はいぜんとして鐘敬文氏が愛した、勤勉で向上心が強い素朴な青年そのままである。

ただ、その青年も今や40歳を超え、これまで蓄積してきた膨大な知識を熟成させ、自らの言葉で語る時期に差しかかっているといえるだろう。また、その秀でた国際的・学際的感覚はそのままに、研究の成果をより明確に中国民俗学へ還元することも今まで以上に求められるだろう。あるいは、こうした期待が氏の軽やかな個性にとって足枷になってしまうかもしれない。だがそれは、期せずして「鐘敬文氏の最後の弟子」という名を刻印された王氏にとって、もはや逃れがたい使命であり、宿命でもあるのではないだろうか。

